慶安太平記

（芝居見たまゝ）――煙の人

――（市村座十二月興行一番目）――

先代以來、高島家の家の藝と稱さるゝ丸橋忠彌を、一座初役の中にも菊五郎が新演出といふのが呼物で、尙ほ常もの藏踊から捕物の外、序幕に道灌山の試合をつけ、三幕目へ、明治三年以來出た事の無いといふ有馬溫泉の場といふ長幕なさし加へた。此の篇、序幕及び三幕目を比較的悉しく書いて、他のいつもの場面は略筋の、所々異つた點を加へて置くことにする。序ながら、前記明治三年に演ぜられた折の役割を左に摘記する。

△有馬温泉宿の場、同じく高塚廣野の場

役名	先代	今度
増田八右衛門	芝翫	東蔵
代官島村軍蔵	翫太郎	菊三郎
九郎兵衛	仲蔵	新十郎
亭主佐五兵衛	鳳八	吉兵衛
湯女小藤	紫若	米蔵
金井谷五郎	訥升	三津五郎
大竹初蔵	左團次	吉右衛門
歌澤芝金		寅右衛門

□序幕　道灌山試合の場

烈しい山風して幕が明くと淺黄幕が下りて居る。仕出しの百姓が三人何やら喋舌りながら、下手から上手へはひると、直ぐ切て落す。驛路の鈴の音と交ぜて大ドロの山おろし。舞臺眞中に、白木造の小さな堂。上下は藪疊みで、松の立木。下座の唄になる。

〽夫れ春宵の定めなき、空のならひも西北に、棚引く霞雲となり、山霧深く立覆ひ、今までありし月影も、鞍馬の奥に異ならず、道灌山の藪道、夜風烈しく吹ならし――

花道から三津五郎の金井谷五郎、紫がゝつた紋付小袖に、裁付、草鞋大小、菅笠を持て、紫紐の後ろ茶筌の鬘、斜に風呂敷包を背負つて凛々しい旅裝、唄一ばいに例の七三へ立止つた。

『今宵夜半の鐘を合圖に、同志の面々約を違へず、道灌山へ集合なし、豫ての密事談らはんと、時刻をはかり參りしに、如何なせしや田端にて原野の道をふみ違へ、……金井如きの豪傑が狐狸に誑らかされしか、はて殘念な事ぢやわい』

と四邊を見廻し、呆然とする。

唄〽折しもこなたの山谷に響く天狗界――

幽かに竹刀の音が聞こえる。

『はて心得ぬ、さては世俗の口碑に傳ふ、東叡山の二本杉には、夜な夜な天狗集ふと聞きしが、さては鞍馬の天狗ばら、爰に集り槍劍の、勝負をなすと覺えたり、いで近寄つて手並を見せん』

右手に持つた鐵扇に力を籠めて、ツカ〳〵と舞臺眞中へ來た。ト、バタバタと左右の奥から四人つゝ、烏天狗の扮裝で、手ン手に得物を持て立現はれた。

『やァ穢れ不淨の身を以て』

『何故爰へ來りしぞ』

『疾く〳〵此場を立去るべし』

『否むに於ては此儘に』

『一命助けて歸されぬ』

『抑も先づおのれは何奴か』

『其名を名乘り三拜して』

『早く退散』

八人『致し居らう』

金井を取卷いて詰め寄つた。後ろの堂の格子が左右に開いて、中には緋の道服に羽團扇を持た白頭の僧正坊が床几にかけて控へて居た。

『小癪な事をッ』と鐵扇に見構へた金井は、八方から打込んで來る木太刀の下を掻い潜つて渡り合ひ、ちよつと烈しい立廻りになつたが、天狗

月江言慶安太平記道灌山の場　吉右衛門の正雪

市村座

十二

共は直ぐと下手の鼓壁へ追込まれた。

『いで此上は僧正坊、覺悟致せ』

と立向ふ金井は、僧正坊が右手を延ばした羽團扇に、五體すくんでタヂ〳〵になる。

『金井谷五郎、稀代な術であらうがな』

『やゝ、さいふは正しく正雪殿の吾聲に』

『似たるも道理、手前でござる』

『やゝゝゝ』

と僧正坊は鈴かけ、面、緋の衣をかなぐり棄てると、それは吉右衛門の由井正雪であつた。脊割羽織、野袴、右手ざし、惣髪撫つけの鬘。堂の縁先へ床几を進めた。

『さては鞍馬の山中と見えたるも、貴殿の幻術なりしか』

『豫て御身が望まれし、我幻術を行ひて、不思議を御覽に入れたるも、武術の奥儀をそれとなく御諭し申さん爲ばかり、無禮の段は御用捨下され』

金井は下に居て、眼を膝の上へ落した。そして僅かな劍術に誇つたのは面目ないといひ、更らに、正雪に幻術の起りを訊ねると、天草で森宗意軒といふものに傳へられたと答へる。金井は今天下を握らうとする貴殿が、幻術などを行つたと傳へられるは、却てよろしくない、正しき道の軍法で本意を遂げられたいと勸說した。

『手前も疾より左樣存ずれど、彼の月蓮の弘通に傾ひしもの、貴殿の意見に基きて、今宵限り再び天へ戻しますれば、最早生涯用ひませぬ』

『すりや我意見をお用ひあるか、シテ大義のお手配りは？』

『されば手前は駿河にて成長なせし因みにより、大義を發する其節は、駿府城を攻落し、久能山へ立籠り、關東、大阪兩軍の中央にて指揮なさん』

と、それから金井を大阪の大將に、江戸表は丸橋をと、いろ〳〵の話があつて、

『今宵の月を鏡となし、神文誓紙を取かはし、大義の臍を堅め申さん』

三津五郎の谷五郎

といふ正雪の詞に、金井は不審の眉を寄せ、他の同志の面々が見えぬはと訝かる時、

「あいや疾くより我々は、これに控へて罷あり」

と時藏の駒飼五郎平　男女藏の勝田彌三郎を先きに、吉兵衛、吉之丞、其他八名の浪士、何れも凛々しい扮裝で、どやくと立現はれた。金井は更らに驚いた。

「すりや先刻の小天狗と見えしは、各々方であつたるか」

「これも手前の幻術にて、人目を晦ます鞍馬の奥……」

と一同に臺詞が渡つて、正雪が、

「いでや軍議を致すでござらう」と、一巻を取出して押開く。何れも見合つて、山おろし、カケリの鳴物で幕になつた。

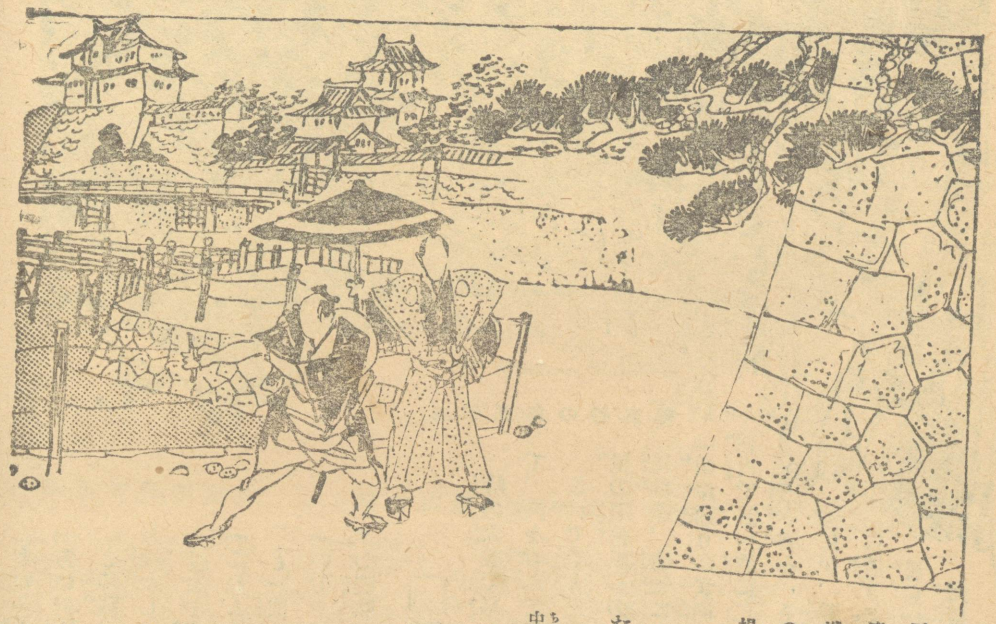
二幕目　西丸外濠端の場

時の太鼓で幕が開くと、舞臺はお約束通り、下手奥寄りに屋體店、二脚の床几にぞんざいに腰をかけて、酒を呑んで居るのは伊三郎、吉之丞に大五郎の仲間。亭主は甞助である。

これで恰ど三度めだが、酒は半替りの方がよつほど徳だなぞと、何れも捨ぜりふでへべつて居る。飴屋の出舍ぶしのやうな囃子で、菊五郎の丸橋忠彌が揚幕から出て來た。左團次のに比べると大髻も少し細目に、總體に小柄に見える。七三で例の臺詞。

「川岸通りの居酒屋で、たつた二ツ銚子呑だのが、大そうに醉が出た——いや出る筈でもあらうかえ、まづ今朝内で迎へ酒に二合呑み、それから角のどぜう屋で、あつい所をちよつと五合。そこを出てから始で、二合づゝ三本呑み、それから跡が雁鍋で、好いきわだがあつた所から、又刺身で一升と、飛んだ無間の梅ヶ枝だが、妥で、三合かしこで五合、拾ひ集めて三升ばかり。是ぢやア終ひは源太もどきで、鎧を質に置ざアなるめえ——と少し反身に時代に言つて——いや裸になつても酒ばかりやア呑まずにやア居られねえや——と碎けた調子。

舞臺へ來て上手の床几へかけ、亭主から仲間を相手に、酒を呑み大腹に喜つてやり、



同　豪　端　の　場

『何、おれに天下が取らしたい――』と張つて云ひ『子供の獨樂ぢやアあるめえし』と笑つて退け、トゞ仲間が去つた後、犬が出て來る。亭主に酒を催促し、それから例の刺身を買ひに町へやつた後を捨ぜりふで見送つた眼にはひつたのは、向うから來る舅の藤四郎。

藤四郎は東藏であつた。躾いて鼻緒を切り、忠彌が出て例の金の催促から强意見になる。此間すべていつもの通り、やがてその儘寢て仕まふので藤四郎は立上り、

『人品骨柄人並に勝れた業を持ながら、酒ゆゑ性根をうしなひて、娘は元より親にまで、斯る難儀をかけるといふは、これもやつぱり酒の科、アア氣狂ひ水とは、よくいうたものだなア』

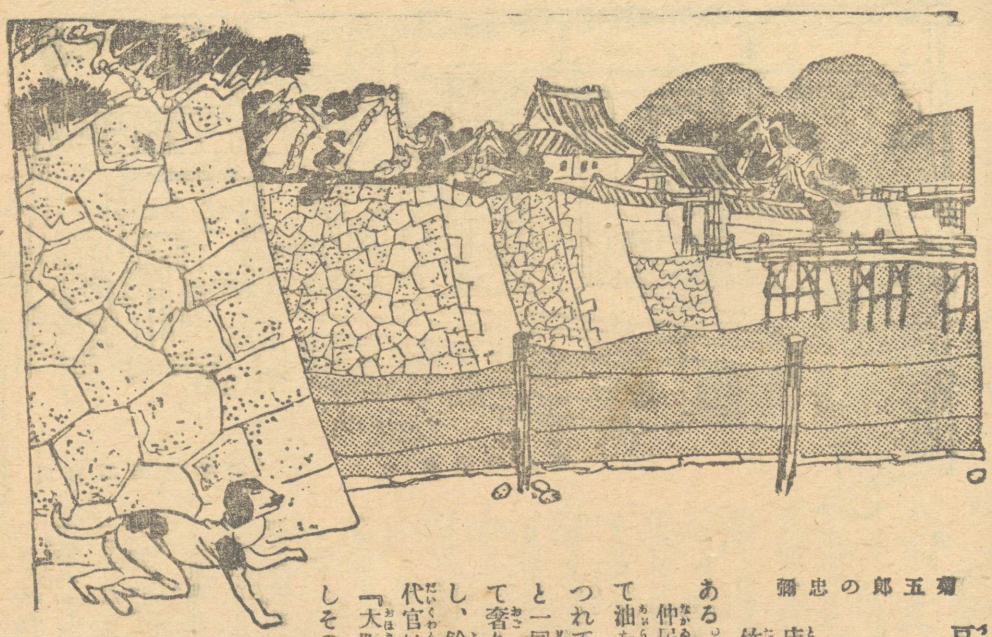
と唄になつて上手へはひる。あと雨車をかすめて水の音になり、犬が出て來て寢て居る忠彌の口の端を嘗めるので眼を覺して、四邊を窺つた。

吠えかゝる犬へ打つ石は、巧みに豪中に投げ込まれる。最初の石は起上りざま床几へ突伏してドゝゝゝといふ水音を聽いた。よろめきながら投げた二度目の石は、豪端の棚に凭りかゝつて水中を凝つと見入つた。犬を追ひながら下手へ花道のつけ際まで來ると、知らせなしに、舞臺蛇の目の内側だけ道具を廻し、兩袖の石垣をその儘に、遠見の二重橋が鮮やかに描き出された。

吉右衛門の伊豆守

八方へギラリ〳〵と眼を配る忠彌は尙ほ醉態の足どり怪しく、犬の足を踏んで吠立てるのへ、第三の石は眼にも止まらず豪中へ投ぜられた。恰ど此時が舞臺の眞中手早く出した眞鍮の煙管、その千段卷を量りに、御約束の大見得になつた。

と同時に上手奥から吉右衛門の伊豆守が出て、蛇の目の傘をさしかける。氣がついてよろめく忠彌、所謂氣味合の笑ひになり、呼止めになり『忠兵衛と申します』で花道へかゝり、又た呼ばれて『行け〳〵』と言はれ『何の事た、どれもう一ぺん呑直さうか』で大股の千鳥足で向うへはひる。コーンと本釣りが鳴つて、見送る伊



彌五郎の忠彌

豆守は、蛇の目を左り手へ持ちかへる、柝の音を刻んで幕。

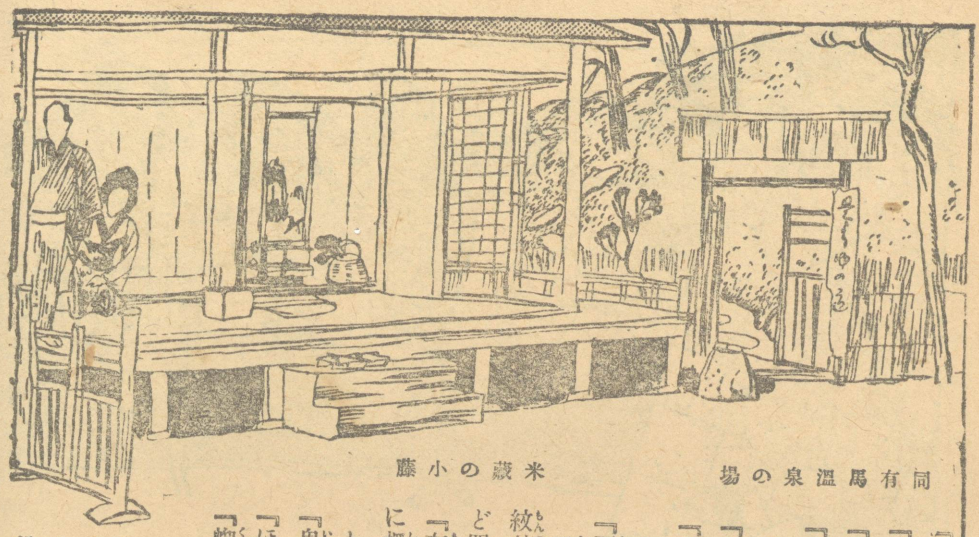
二幕目　有馬溫泉宿の場

賑やかな騷ぎ唄で幕が開いた。正面を明放して山の遠見、中足の二重屋體、上手寄りの床の間も瀟洒に、下手には下羽目板の中二階、そこには伊豫簾が下りて居る。上手の方は竹垣で見切つて、屋根付の門柱には『浴場入口』と書いた掛看板。石の低い手水鉢などがある。

仲居が二人、若い者が二人。上下に居て女の噂さや、隣りへ來た歌澤の師匠の噂さなどをして油を賣つて居る。向うから菊三郎の代官荒浪軍藏がぶッ割羽織、野袴、大小で、若徒一人をつれて『亭主に會はう』と上座に坐つた。奥から吉兵衛の亭主佐五兵衛が出ると『密々なれば』と一同を淸ざけた代官は、先達てから逗留する二人の武士は、江戸の者といふが、湯女を集めて奢りの酒宴を設け居る由、その身許を存じ居るか。と、訊ねる。亭主は紀州家の御藩中と申し、餘程高祿の方と見え、三百金ほどお預けになつて居るが、別に怪しい事もない、と答へた代官は尙ほ、

『大阪の殘黨共が又もや謀叛の企てある由、江戸表より國々へ、手分を爲して嚴しき詮議、もしその餘類の者詮議仕出して差出せば、拔群の身共が手柄、心をつけて早速役所へ注進致せ』と申渡した。亭主は相手が武家故と不氣味に思つて困つて居る處へ、新十郎の九郎兵衛といふのが現はれた。木綿物に縞の半纏、五分さかやきで一癖ありげである。自分は此家の湯女小藤の兄で、ちよつと當りがあるから、その詮議を仰付けられたいといふのであつた。九郎兵衛は尙ほ、彼の武士は近頃まで江戸表で幽かな暮しの浪人者、金を湯水のやうにまき散らすのは怪しいやつと睨んで居た。と話すので、代官はよき目明しを得たと喜び、褒美の約束などをして立歸つた。

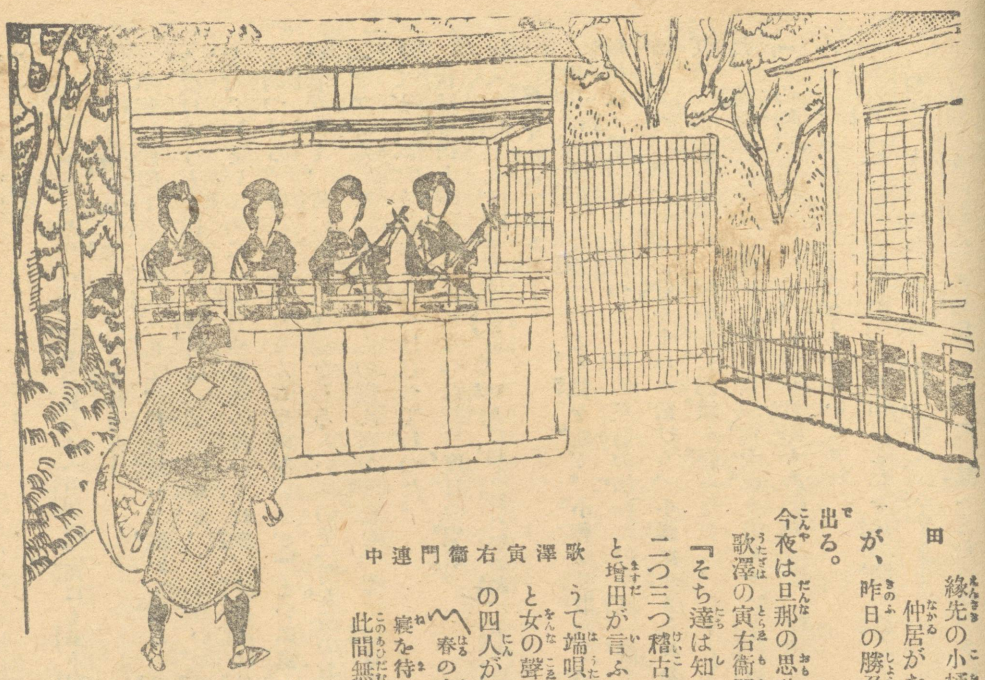
亭主と九郎兵衛はこんな會話をして居る。



同　有馬温泉の場　　米藏の小藤

「もしや泥棒でも」
「盗人もしめえけれど、どうで唯だぢやァあるめえよ」
「それなら若しや贋金でも――」
「私が圖星とかぎ付けたは――これ」
と九郎兵衛は亭主に私語くと、
「それなら謀叛の――」
「これ大きな聲をしなさんな」
と亭主は尚ほも掛り合になるを恐れて居る。九郎兵衛は、
『惡事の沖を越して來た、おれが舵を取るからは、危ねえ舟へ乘せやァしねえよ』
二人が奥へ連立つてはひると、太皷入りで派手な出唄になつて、向うから東藏の増田八右衛門、黒紋付の羽織着流しで、堂島下駄を穿き、續いて全盛の湯女小藤（米藏）男女藏、玉之助、三津太郎など四五人の取巻何れも赤前垂れに派手な着付、ズラリと花道へ列んだ。
『有馬山、いなの笹原風吹けば、いでそよ人とつらねたる古歌の心を有明の、櫻にくらす山狩に、松に櫂らむ小藤を連れ、戀にはのぼる有馬山』
と東藏から順に臺詞が渡る。
『卑しい此身もお情けに、人形筆の命毛かけ、連理の松の千代八千代、緣結びし中の坊』
『ほんに離れぬ布引の女男に流るゝ瀧よりも、湯宿に夜毎濡浴衣』
『蜘手の瀧かさゝがにの、いとし可愛の沖越えて』
『互ひの思ひいく瀬川、誰白石の瀧の絲』
と、又た東藏へ戻つて、
『遊び暮して來るともなく、向うは宿のもう庭先――』
早く歸りませう、ござんせえなァと、一同座敷へ來た。奥からも最前の仲居等が出て來て賑やかに、増田は上手緣端の柱に脊を持たせて斜に坐る。男女藏、玉之助等は持て來た花の枝を

東藏の増



吉右衛門の初藏

田

縁先の小桶へ投げ入れて順に坐つた。

仲居がお隣りのお客様から御手紙と渡すのを受取つた増田は、鷹揚に『又た碁の好きな御隠居が、昨日の勝負をしようといふぢや』と手紙を見て『後方参ると申してくりやれ』と、その中盃盤が出る。

今夜は旦那の思ひ付きで、家中一緒に川崎音頭の惣踊りがあるといふ事から、隣座敷へ東から來て居る歌澤の寅右衛門の端唄があるといふ話。

『そち達は知るまいが、その歌澤の寅右衛門といふは、誠に聲の好い師匠で、身共も東に居た時分、二つ三つ稽古を致したが、却々難かしいものだ』

と増田が言ふと、小藤は『最前お唄ひなされたは、何といふ唄でござり升』と訊く。『あれは我物といふて端唄の中での聞きものだ』といふ中に奥で『さァ〳〵お師匠さん、早く聽かして下さりませ』

歌澤寅右衛門連中

と女の聲、柝がはひつて下手二階の伊豫簾を巻き上げる。寅右衛門、寅松、三味せん寅秀、寅榮の四人が列んで、直ぐと美くしい聲が場内をしいんとさせた。

〳〵春の夜の夢も結ばで明烏、殘る口舌の有馬山、いなぬともなき後朝に、たがひに募る戀の情、はれて添寢を待つわいな——

此間無言で盃のやりとりで唄に聞き惚れて居る。増田は立上つて下手の縁端へ出て聽く中に、席が座敷の眞中に移される。唄が切れると、小藤はほッとしたやうにいふ。

『歌澤といふものは。今夜初めて聽きましたが、文句も節もすッきりと、妾しや惚惚しましたわいなァ』

『いや、武骨の身共も、どうやら心が浮いて参つた』

と増田は席に復して感嘆した。其中皆なが小藤と増田の仲をからかひ、小藤は嬉しいやうな、きまりの悪いやうな態度をする。増田が『噂だけでも悪くは無いが、あんまりさうでもあるまい』といふので、小藤は『憎らしい口』とツンと拗ねて立上つた。

又一くさり端唄。

〜粋な浮世も憂ゆゑに、野暮な愚痴さへ有明の、花にも曇る空癖の、雨もいつしか春の宵、星もちらほら薄明り——

小藤は此間上手の縁先へ出て、獨り離れて聽いて居る。増田がさす盃を受けようとも仕ない。増田は『又た癇癪か、もう好い加減に笑ひ顔を見せろ』といふのに『妾しや愛嬌の無い生れ故、笑ひ顔は出來ませぬ』と刎つける。増田は『又たそんな皮肉をいふか』といふ處へ、奥から若い者が出て、皆に踊りの仕度をしろといふので、男女藏のおしけを始め、

『まア心なしな、お二人さんの飛んだお邪魔を、なア皆さん』と粋を通してどたばたと何れも奥へはひつて行つた。

後は増田と小藤の二人になつた。三度目の端唄。

〜薄紅ににじみ勝なる玉章の、切るに切られぬ鞭の鞘、泪の雨のふるさとへ泣いて別れて歸る雁——

増田は大分醉うて參つたと羽織を脱ぐ。小藤は受取つて疊みにかゝる。増田は上手の方へ入代つて、床の花瓶の枯れたのを庭へ捨てゝ、最前山から折つて來た緣端の花をそれへ活ける。小藤は水さしを盆へ載せて持て來て無言で下手へ、唄の間に羽織を疊みながら、しく〳〵と泣き出した。花を活けながら顧いた増田は『何を泣くのぢや』と咎めた。

『あの端唄を聞くにつけ、いつか貴郎もあのやうに、故鄕へ御歸りなさんせう。それが悲しうござんすわいなア』

『何を申す』と花を活け終つた増田はこれを床の間へ直して座に戻る。

端唄〜とめて留らぬ春の暮、花を見捨てゝ心ゆく——

と此間男女は搦んで色模樣になつた。膝へもたれるやうに坐つた小藤の肩へ手をかけた増田は、

『保養がてらに御主人へ、長の暇を願うて來たれば、何時歸らうと儘な身の上、もし又國から迎へが來たら、おぬしが身體を身儘になし、一緒につれて行かうわい』

『エ、そりやほんまの事でムんすかえ』

『苟且ながら二世かけて、言ひかはせし上からは、國へ伴なひ宿の妻』

『それほどまでに……』

と小藤は直と寄り添うてにッこりする。

端唄〜花も實を、結ぶ誠のほんの床、若葉にくらき下塵歟——

『あれあの端唄の花も實を結ぶ誠といふ所を、一寸覺えて置たいもの』

と小藤が三味線を出すと増田は取り上げて『覺えたらば、あとでおれが致へてやらう』とまた一しきり端唄の

〜囀す間もなき短夜に、東雲近く時鳥、唯だ一聲を二人して、左りと右の耳に聞く、花の名殘ちやないかいな——

の間、二人は立上つて下手縁端へ出て聽きしむのであつた。

簾が下りて歌澤は消える。合方になつて下手奥から吉兵衛の亭主が出て來た。挨拶の中に續いて新十郎の九郎兵衛がのッシリはひつて來た。

『お前は兄さん、爰はお客の座敷でござんす。部屋で待て下さんせ』と小藤がたしなめるのを『何もそんなにソッケなくいふ事もあるめえぜ』と坐り込んで、そろ〳〵例の金の無心を始めるのである。増田は面倒とでも思つたか、床前へ後向きに花籠をながめて居る。

『兄さん、安しや奉公の身でムんす。金のなる木は持つまいし、大概にして下さんせえなア』

『此湯治場で大盡と、いはれるお客が手めえの剛染、金のなる木のあるのも同然、其旦那へ頼んだら、僅か五十兩の事だから、出來ねえ事もあるめえぜ』

と九郎兵衛の眼は終始増田の方をさして居る。小藤は返す言葉もなく困つて居る。席に着いた増田は『安い事、身共が用立て遣はさう、可愛いそちが兄とあれば、惜しうは思はぬ五十兩』とやがて亭主に預けてある中から五十兩だけ直ぐに持て來てやれと命ずる。小藤は濟まぬと禮をいふ。増田は更らに九郎兵衛に盃をさせば『酒と聞いちやア眼の無い九郎兵衛』と小藤が早く歸れといふのを、せゝら笑ひながら飽くまで坐り込んで動かうともしない。

『松になりたや――』の唄になつて向うから吉右衛門の大竹初藏。丸に初の字を染抜いた胸當、紺の手甲脚袴、素足に草鞋穿き、飛脚のこしらへで足早に出て來た。

『どうか御兩所の内にお目にかゝりたいものだなア』と木戸口から覗き込んで『や、それにお在なさるゝは、八右衛門さまではござりませぬか』『おゝ、さ言はるゝは大竹氏――イヤ初藏か、これへ參れ〳〵』と増田が呼込んだ。

『遠路の所を大儀であつた、先づ一口呑んだがよい』と増田の盃に眼もくれぬ初藏は『江戸表より火急の御使、委細の事は御狀の中に、いざ御披見下されませう』と懷中から一通を取出して増田に渡した。眞中少し奥へ寄つて坐つて居た九郎兵衛の眼はギロリと光つた。増田は醉態をよそほつて、

『いや長逗留致す故、早う歸れと家老中から、大方迎への書狀であらう、文體は見るに及ばず、書狀は確かに受取つたと、立歸つて言うて呉りやれ』

増田の心中は初藏に讀まれなかつた。

『いや申し増田樣、貴所も餘りの當推量、遠路の所を夜を日に次ぎ、拙者がこれへ參りしは……』

『こりや〳〵口數を申すに及ばず、仔細は承知致し居る』

『ではござりませうが豫ての大望……』

『これはしたり、初藏、大望とは何の事ぢや、燕雀何ぞ鴻鵠の心を知らん、此の書面は見るに及ばぬ、無益の手紙はまッこの通り――』

九郎兵衛の眼の光り、初藏の野暮堅さ。増田は彼の一通を取り出して其場でズタ〳〵に引破つて丸めて捨てた。九郎兵衛がこれを取らうとするを、小藤が慌てゝ拾つて了ふ。初藏は呆れ顔、増田が破つた一通は實は以前隣りの客から來た手紙とすりかへたものであつた。それは誰れも氣がつかなかつた。

『こりや大事の密書をッ――』

と初藏が立かゝるを、小藤は中に

『お前の大事と言はしやんす此の手紙は、お國にお在の奥樣か、お妾さんの迎への文でござんせう、妾しや腹が立つ故に、夫で貰うて置升する』

と増田に寄り添ふ。『いや、こいつよッほど廻り氣な、悋氣するとは忝ない』と増田も小藤の膝へもたれて、

『どうぢや兄貴、此心てい故、身共が小藤に執心致すも、無理ではあるまい』

と傍若無人の醉態痴態を見せるのである。苦肉の謀も初藏には容易

同　高塚廣野の場

東藏の八右衛門

三津五郎の谷五郎

に通じない。

『いや増田樣、いやさ八右衛門樣。此の有さまは何事でござりまする。大切なる御用故、かゝる姿で初藏が、持參なしたる其の密書、披見もなされず引裂き捨て、それで濟まうと思はッしやるか。大事な身體を持ちながら、女に魂奪はれて、言はうやうないこんたはなァ——』

と向きになほつて責め立てた。何と言つてもたはいが無いので、初藏がキッとなる時、奥から、『やァ〳〵初藏早まるな』と三津五郎の金井谷五郎が現はれた。羽織着ながし、左りに大刀を下けて居る。

『あなたは金井谷五郎樣！』

『増田氏の此場のやうす、立腹なすは尤もながら、唯だ何事も他言を憚る、イヤ大醉の上なれば此場は此儘捨ておきやれ』と制止した。初藏が尙ほ爭そふのを、さま〳〵に說得する。増田も起き直つて金井に挨拶する。金井が調子を合はせて『何さま彼れは國育ち』といふので、初藏は頬をふくらして憤つて居る。

仲居が大勢出て來て、踊りの仕度が出來たと知らせるので、増田は『座敷をかへて呑み直さう』と小藤をはじめ、九郎兵衛にも一緒に來いといつて立上り『金井氏にも』といひ初藏に『こりや初藏、何事も酒興の上許してくりやれ』といふと、初藏がキッとなる。金井が制する。松になりたや、の唄になつて、どや〳〵と皆奥へはひつて去つた。

『こりや斯うしては』と初藏の立ちかゝるを押へた金井は『事荒立てゝは大義の破れ——』と二人は増田の本心を探るべく呼やき合ひ奥へはひると、時の鐘がなつて合方になり、奥から小藤が座敷を抜けて來て、最前の手紙を取出して見ようとする所へ、蹴けて來た兄の九郎兵衛『屋敷の手紙は手めえ達にやァ讀めやァしねえ』と二人はその手紙を奪ひ合ふ。九郎兵衛は小藤を引据ゑ『貧乏ゆるぎもさせるものかえ』といふのが柝の頭で道具が廻つた。

□同　高塚廣野の場

平舞臺、丸竹の高藪、杉の立木、森々と夜陰の體。風音に冠せてコーンと時の鐘。

床〳〵入相の鐘にくれ行く高塚に、一むら茂る藪疊、直なる竹の横道より、胸に思案も有馬なる、二の湯の裏手一筋に――

と、禪の勤めになつて向うから吉右衛門の大竹初藏が駈て出て來た。舞臺下手寄りに立止つて四邊を見廻した。

『正雪殿の大望に、一味加擔の人數の中、衆に勝れし器量ある故、谷五郎殿と兩人を、大阪表へ遣はされしに、頭と頼む八右衛門――もし變心に極まらば、味方のもの〻一大事。む〻幸ひの此の竹藪、玆へ忍んで來るを待受け、善惡糺した其上で――』

と、刀の目釘を濕し、下手の藪疊みの中へはひつた。

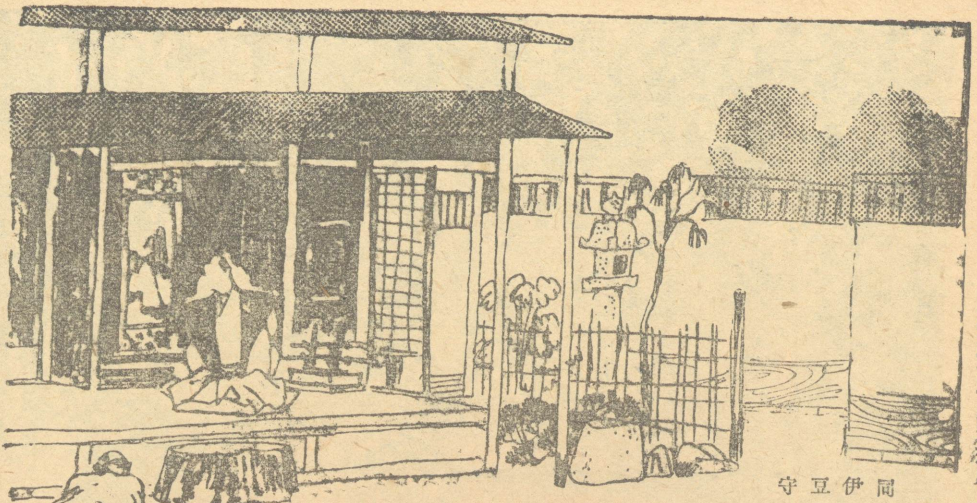
『折もこそあれ向うより』とチョボになつて、四つ手籠が一挺、あとから谷五郎が附添つて出て來た。舞臺へ出て籠を下ろさせ『待合はす人があるから』と駕屋へ酒代をくれて『成べくゆるりと呑んで來い』と遠ざけやつた。

時の鐘、蛙の聲が聞える。金井は駕側に立寄つて『増田氏々々〻いやさ八右衛門殿』と呼んで見たが、應へが無いので、駕の垂れを上げると、増田は好い心地に睡つて居る。搖り起された増田は『誰ぞをらぬか、水を持て〳〵』とたはいも無い。

『増田氏、心を確かにお持なされえ、金井谷五郎でござる』

『や、誠に貴殿は谷五郎殿』――と四邊を見廻して『こりや座敷と思ひの外、あたりも廣きこの原中、何しに此處へ參つてござる』と怪訝な顏。

『チト密々に御談し申す事がござつて、拙者がお連れ申した』といふので『又例の御意見か』と眉に皺、谷五郎は駕の桐油を上手へ敷いて増田をそこへ請じた。澁々と駕から出た増田は、桐油の上へ坐りながら『醉覺めの水が一杯貰ひたい』といふ。只今進上申すといつた金井は、扇



同　伊豆守

面を開いてその上へ九寸五分を載せて増田の前へさし出した。

『水より冷たき氷の刃、これを貴殿へ進ぜたい』とキッパリ言つた。増田は醉眼を開いてじろりと見た。『この刃物を某へ――いかなる仔細』と兩手を膝に金井を見た。床の合方で、

『仔細と申すは外ならず、正雪殿の大義に與し、攝州表の大將を承りし貴殿と某、人目を晦ます其の爲めに、湯治といひなし此土地に、足を止めて江戸方の、便りを今やと相待つ中、打て變りし貴殿の行跡、密事の使者の大竹が、持參の書狀を引裂きしは、愈よ性根の亂れし證據、かくては味方の不爲故、此處にて切腹お進め申す。さ、御返答が承りたい』

義を金鐵と堅めたる、さすが金井が詞詰め、増田が心はかり兼ね、後ろに窺ふ大竹初藏――と、金井は居合腰になつて詰寄り、初藏は藪疊から顏を出して、息を呑んで居る。默然と聽いて居た増田はやがて顏を上げ、右膝をちよと進めた。

『かく朋友の信義篤く、切腹せよとは忝なき、金井氏の厚情ながら、餘人は知らずそこ許は、御存じならんと思ひしに、やはり小藤に魂奪はれ、放埒惰弱と思はッしやるか――』

と床の合方に、竹笛入りになり、小藤の兄の九郎兵衛は元正雪殿の師と頼んだ楠不傳の邸の小者で、我等の素性を知つたる上、何かに眼をつけ居る樣子、金を餌に手馴けて、其中に目前の害を除かん爲めと打明け、更らに、

『大竹が持參せし、密書の文面、披見せんにも彼等を初め、邊りは鵜の目鷹の目故、懷中なして他の狀を、引裂き捨てし當座の苦計、持參の密書はこれこゝに』

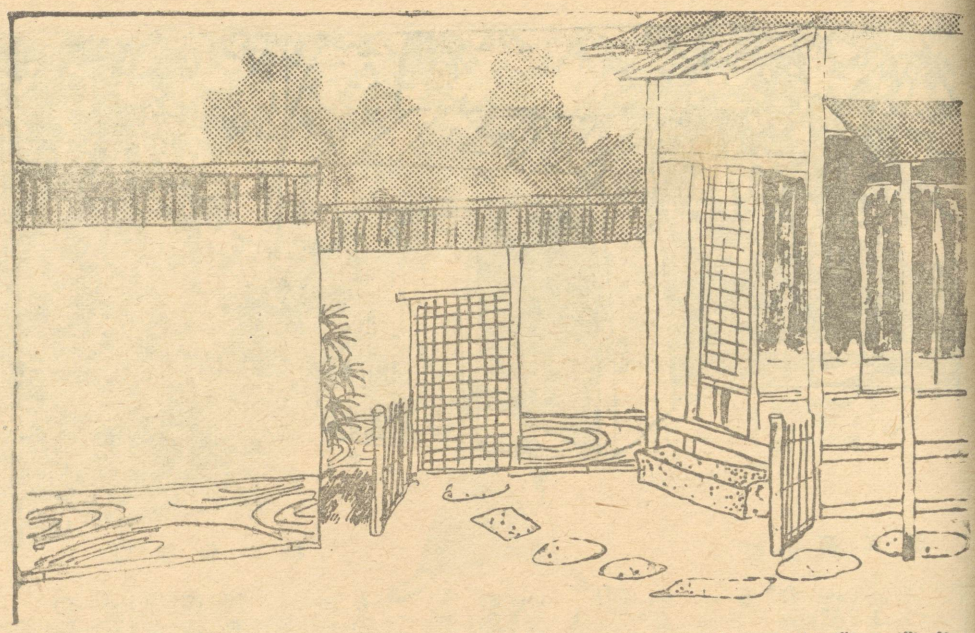
と懷中から以前の書狀を出して見せた。金井は驚いて、駕の提灯をさし出して見る。藪かげの初藏も、さてはと驚いた。文面によれば當月二十六日いよ〳〵大義を發するとある。

『もしやと貴殿を疑ひて、大竹、某兩人にて、他聞を憚る大事ゆゑ、人里離れし此の廣野に、貴殿を伴ひ來りしは、この本心を知らん爲め、これにて安堵致したり』

と金井は喜んだ。面目なけに出て來た初藏は兩手をついて、

邸の場

吉右衛門の伊豆守



東藏の藤四郎

『その心底を知らざるゆゑ、一圖にせまる此の初藏、面目次第もございませぬ。――當地の模樣斯く〳〵と、直樣江戸へ立歸り、同志の者へ片時も早く、して、正雪どのへ御兩所よりの御返書は』

と初藏の言葉に、言ひ合はしたやうに各一通の書狀をさし出した。受取つた初藏は、『然らば拙者はこれより直ぐに』『時刻違はゞ何かの手ちがひ』『御苦勞ながら片時も早く』『おさらばでござりまする』と勇みに勇んで走せ歸つた。

皎々たる廣野の月。蛙の聲。

二人は立上つた。

『やがて發する大望の』

『折から晴るゝ夜半の月』

『はて心地よき』『幸先きぢやなァ』

此の少し前から上手藪壘のかげに潜んで居た新十郎の九郎兵衛が躍り出でだ。

『謀叛人め――』と增田の胸倉を取ると、くるりと廻した增田は拔打ちに只一刀に斬下げた。うーむと仆れた骸を照らす月影に、二人は上下に入れ替つて、增田は本花道へ、金井は東、假花道へかゝり、增田が、

〳〵月は鞍馬の僧正が、谷にみち〳〵峯を動かし――

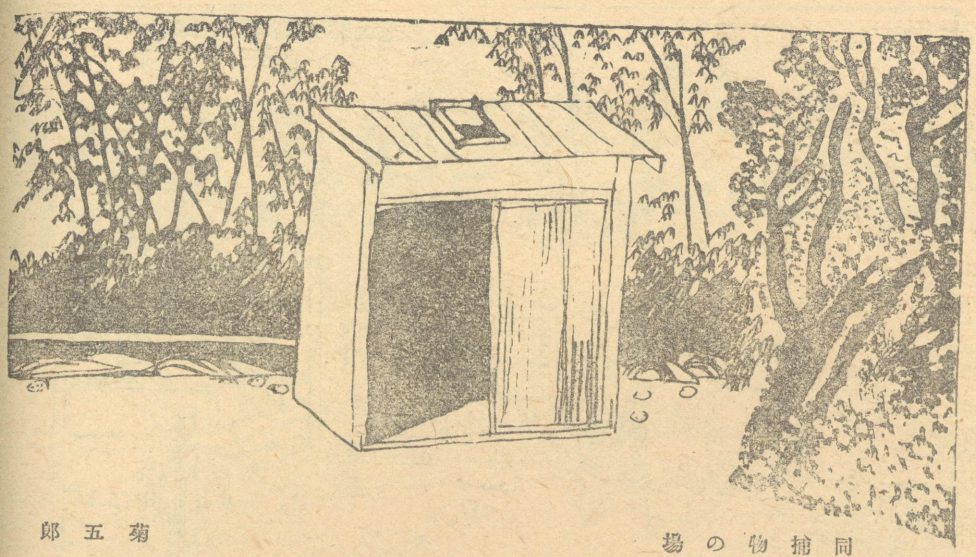
と謠ふに續いて、金井は、

〳〵嵐こがらし瀧の音、天狗だをしは――

と、二人が〳〵おびたゞし――と謠ひ了つて互ひに見合ひ、

『うふ、あは、うふ、あは、あはゝゝゝゝゝゝ』と二人が一緒に笑ふと、本釣を打こみ、しづかな三重の絃の音で、兩花道へ引込む。柝を刻んで幕になつた。

□大詰　丸橋忠彌浪宅の場



同捕物の場

菊五郎

早めた合方で幕が開くと、平舞臺世話木戸その他いつもの通り、時藏の駒飼五郎平、男女藏の勝田彌三郎、時藏は黒、男女藏は濃い蒲黄がゝつた着付、裾短かの袴、大を左手に立膝に構へ、米藏の忠彌女房おせつ、品の好いこしらへの大丸髷もうつりがよく『急用で參つた我々、眞本性あるかないか、奥へ參つて見屆けよう』と勝田の方がいきり立つて居る。駒飼はゆゝ穩やかに止める風、おせつがおろ〳〵と制して居ると、上手附屋體の中で菊五郎の忠彌の聲。煙草盆を下げてお約束の燻んだ八丈風の小袖着流し、白足袋穿きで出て來た。

稍や酒に醉うた風『御兩所のお出は、疾くより存じ居つたるが、初めの程は借金取と思ひ違へ、こいつ逢つては大變と、息を殺して罷あつた。これを思へば世の中に、借金取ほど恐しいものはござらぬわ』と哄笑する。

二人は膝を進めて『彼の一義』と言ひ出すので、忠彌は『野暮を言はずに一杯呑まう、内談も酒席にて、さすれば人の心が注かぬといふもの』と女房に酒を持てと命ずる。おせつが又たお酒かと嫌な顔をするので、

『女子と小人養ひ難し、たとへ如何ほど醉へばとて、前後忘却致さうか』

とキツと言ふので、二人も落ついて『御本心承つて先づは安堵、此上は萬事よろしく』と列んで坐つた。

『身共に指圖をせいと仰せあるか、如何にも御指圖致し申さう』

と膝を正して容を更ためた。おせつは心得顔に立上つて、木戸を開け、外方に心を配つて居る。三人は額を鳩めた。忠彌は繪圖面を取出して二人の前へ、煙管を以てさし示し、種々話し合ふ事がある。

『然らばこれより彼處へ參り、同志の者へ手筈を致さん』

と二人は漸く納得した。忠彌は手早く繪圖を疊んで懐中する。二人は一禮の上立歸つた。おせつが戻つて來て『お二人とも勇んでお歸りなされました』といふ中、忠彌は天窓を押へて、飲み過ぎて、頭痛がする』と枕を取てその儘そこへゴロリとなつた。捨ぜりふでおせつが撥卷

の忠彌

をかける。此の浪士の件が例ものとは違ふのである。茲で例もは、母親が出ていろ〳〵あるが今度は母親は出ず仕舞の、直ぐに藤四郎の出になるのであつた。

藤四郎の金の催促から『浪人風情』と輕侮まれて『二百兩は愚かな事、何萬兩でも我手に入る、近い中に吉事がござる』の臺詞になつて、女房が袖を引くのを振拂つて『仔細と申すは外では厶らず、遠からず天下を握る此の忠彌』と藤四郎のビックリするのへ冠せ『舅殿お聞き下され』と合方きッぱりとなつて、長曾我部の素性から委細を話し、連判狀を示し、事を舉ぐるは二十六日まで喋舌つて仕舞ふ事總ていつもの通りであつた。

飯どころでは無いと、藤四郎は、ガチ〳〵震ひながら、喜ぶ風を表に示し、木戸を出てほッと一息。ちよつと兩手を合はし尻からげ一散に向うへはひる。あとに忠彌は酒を呼んで、例の茶碗の割れる事あり、廣蓋の小丼を取て突出すのが柝の頭、『これへ注ぎやれ』と道具が廻ると、

□同　伊豆守役宅の場

此場も總て例もの通り、庭口から直ぐに藤四郎を呼び出して、吉右衞門の伊豆守、訴人の旨を訊正した。委細を聽いて彼の濫觴を想ひ出す事、藤四郎を座敷へ上げて、改めて一體述べ、汝の母は予が乳母なれば乳兄弟との述懷など、總て本文通りであつた。

四花五郎と琴三郎の捕人頭が大勢の捕手を召連れて庭先へ出る。捕手は何れも黑四天に白襷をかけて居た。

東藏の藤四郎、御案内をと先きへ立つを、伊豆守は呼び止めて『忠彌は天下の大罪人、妻も同罪取に――が――すな』の思入よろしく、庭先から直ぐ向うへはひるを、伊豆守見送る模樣で道具は元の、

□同　忠彌浪宅の場

に戻つた。夜半に近く、いつもの母親の自害はなく、忠彌は上手寄りに床をのべて寢て居る。

おせつは行燈の灯かけで何やら縫物をしかけて居る。向うから東藏の藤四郎、大勢を後に直ぐ戸を叩き『娘や、藤四郎ぢや、ちよつと開けて呉れ』といふので、おせつは不審ながらがらりと開ける。

『御用だ〳〵』

おせつがピッシャリ戸を閉めるのと同時に、寢て居た忠彌はガバと刎起きた。

捕手は裏口から早やバラ〳〵と繰込んだ。忠彌は早速に木枕を叩きつけると、鴨居に當つて微塵になる。飛起きた忠彌は『刀を持て』と大喝しながら長押の槍を取つてちよつと立廻り『何者が訴人した』といふ中藤四郎が『お上の爲めに私が訴人をしました。忠彌どの許して下され』とはひつて來た。『うーむ』と言つた儘、打てかゝる捕手を追うて忠彌は奥へ、大勢悉らずあとを追うた。

刀を抱へておせつが出て來た。後から藤四郎も出て來た。藤四郎は言ひ譯の爲めと、直ぐに刀を横腹へ突立てた。おせつも共に父に寄りかゝつて咽喉を突いた。――幕。

□同　裏手高藪の場

つゝぎで直ぐに幕が開くと、舞臺を一ぱいに取て、奥藪疊み、眞中に繩釣瓶の掘井戸、上手勝手口を見せ、向うから播五郎の町役人を先きへ捕方大勢、二番手三番手の準備も出來たからと、臺詞があつて何れも藪かげへ隱れる。

太鼓の響夜陰の寂寞を破つて、勝手口を蹴放し、大童になつた菊五郎の忠彌、鴨居を一本振廻して大勢と立廻りながら出る。最初しばらくは棒の殺陣であつた。

痛快に追散らして四人の捕手へ彼の鴨居を投つけるのが、鮮やかに將棋仆し、藪疊みの後ろに提灯の灯が右往左往して『やァ〳〵』の懸聲のみ。舞臺眞中に仁王立になつて居る忠彌。今度は一人一人つゝ突棒、さす叉、袖がらみのタテになつた。お約束の戸板のタテが濟むと、捕手頭が十手で向つて來るやつを刎ね飛ばし、その帶刀を引拔いて、四角八面に斬廻るのであつた。

それから例の烈しい目潰し投けが始まつた。その一つが左の眼のあたりへ命中した。アッと押へた忠彌は猛烈に荒れ狂うて勝手口の方へ駈け込んだ。

賑ぎやかな鳴物、八木節のやうな唄を交ぜて、しばらく、多數の負傷者を戸板へ乘せて運び去ることがある。コーンと本釣に笛がはひつて又ド、ヽーンと太鼓を入れ、奥の藪疊みから左眼の上邊一面に血みどろになつた忠彌がヌッと現はれた。藪かげから『やァ〳〵』の聲かしきりに聞える。

肌を脱いで井戸の傍へ、繩釣瓶を繰つて傷を洗ふ所へ、一人の組子が飛かゝつた。その水をガブリと浴せてひつくりかへるなど御約束の事があつて、やがて總出の大立廻りになり、長い得物で忠彌を取卷いたと思ふと、井戸側へ押し上せて、胸のあたりへ幾十本の突棒さす叉を擬して下から突上げた磔刑の見得になり、丸橋最期の幕は閉ぢられたのである。

《言ふまでもなく、無斷に興行を許されず》